

千刈狸の呟き

あの忌まわしい事件からもうすぐ1年になるろうとしている。昨年の7月26日未明、相模原市の知的障害者施設「津久井やまゆり園」において入所者43人が殺傷された事件である。事件の状況が徐々に明らかになるにつれ、事件が与える衝撃の大きさにただ呆然とするだけであった。何人かの知人は日頃障害者に関わるものとして小生に所感を求めてきたが、正直言葉を失ったままで、言語化しようとする途端に言葉に窮してしまう。

その後も植松容疑者は、取り調べに際して障害者は生きる資格がない等と主張し続けたといい、さらにやりきれないのは彼の「障害者不要論」がネット上では少なからず賞賛され、賛意を露わにするものも多かったという事実。そしてマスコミは植松というモンスターによる「施設で平穏に暮らしていた障害者を襲った猟奇的な事件」との論調を展開、措置入院のあり方の再考を要する方向になってきたことも気鬱になることに拍車をかけている。今回の事件を彼の特殊性の問題として片付けてしまう態度にこそ、この事件の本質があるのではないか。

事件から一ヶ月もしないうちに施設警備の嚴重化としてだろう、当施設では各部署に「刺股」が2本ずつ配られた。長さ2m余りのアルミ合金製で先端部分が二股に分かれた半円状を成しており、柄には“不審人物防御棒『こない手(で)』”とラベルが貼ってある。地元警察官の協力も得て防御棒の使用講習会まで開かれたが、確かに防御が精一杯で制圧とまではいかないようで、刃物を振り回す暴漢に先端部をかわされて間合いに入られると万事休す、といった代物である。

来ないで！—平穏な日常に突如乱入する不条理なるものに抗う必死さ。控えめながらも他者への距離をとらんとする拒否の表れ。施設利用者が社会生活を送るにあたって日常的に遭遇する小さな悪意の数々に刺股をかざしたい気持ちになることもあるに相違ない。がしかし、刺股を向けられて

～刺股（さすまた）～

孫七狸

いるのは逆に障害者側ではないのか？と思うことがある。「ほかのお客様の迷惑になりますので二度と御来店にならないで下さい」—10年ほど前、某飲食店を利用した当施設の利用者数十名に対し懇懇にかつ断固と告げられた言葉である。こっちに来るな。お前たちの来るところではない、ということか。身の程を弁えろ・・・

人との距離感と言うまでもなく社会で生きていく上で不可欠である。無意識のうちに他人と適度の距離を置こうとする。だが、間合いをとるための「刺股」を用いて力づくで押さえてしまっていないか。差別や偏見は誰にでも、何処にでもあるし、差別することは端的に「お天道様に背く」こと、疚しいことだと誰でも分かっている（はず）。一本の刺股の両端のどちらに在るか。理不尽に刺股を向けられる側への想像力は欠かしてはならない。

この事件の衝撃は加害者の残忍さや大量殺人の規模だけでなく、この社会が臭い物にフタ、で押し隠してきた障害者差別のホンネを公然とさらしたところにあるのだろう。「原因」とはよく解らない時、うまく行かない時に取り沙汰される言葉であるという。確かに世の物事が誰の目にも明らかかな因果で運ばば、誰も「原因」などとは言い出さない。この相模原の事件は何故起ったのか？いったい何が悪いのか—社会が悪い・政治も悪い・法制度も悪い・そしてマスコミも一責任の所在は不明のまま。だけど他を捜すから見つからない。「原因」は他でもない、我々自身なのだ。

我々は日常的に、無意識にでも人を差別してしまう度し難い存在であることにもっと自覚的であるべきで、その自覚から始めるしかないのだろう。目の前の壁に掛かっている刺股は我々の「内なる刺股」を戒めるべく、また現実に出番がないことを願うお守りとして鈍色に光っている。手に取ると意外なほど軽く、スッと前に構えた後、おもむろに反転させ先端部を自らに当ててみた。